

地域の動物病院として目指していること

長谷往明[†] (はせ動物病院院長)

私が獣医師となり17年、動物病院を開業して以来、病院スタッフ、家族、そして伴侶動物の飼い主に支えられて14年目を迎え、現在では獣医師8名、動物看護師7名、トリマー4名の病院になった。このような今があるのはいろいろな先生方からのご指導、ご支援があったからこそと、つくづくありがたく思う。今回、日本獣医師会雑誌への投稿という機会が与えられたので、開業してからこれまでの経緯を振り返りながら、私自身が目指すべきこれからの動物医療を述べてみたいと思う。

大学では放射線学研究室に所属し、勤務先でもX線、超音波による画像診断に興味を持ち、内科疾患を多く診ていたこともあり、開業当初、自分としては内科疾患を得意分野とする動物病院にしていきたいと考えていた。しかし、いざ開業してみると、外科手術を必要とする場面が思いのほか多く、外科手術を適切にできないことには目の前の動物を救えないことを痛感した。そして外科を得意分野にできるようになるべく諸先生方に教授を受けるように心がけた。

開業前の研修先である動物病院では避妊、去勢を初め、手術の基本について教えを受けた。ここでの経験が外科手術の基礎となっている。

整形外科に関しては、都内の整形外科を得意とする先生から学んだ。開業1年目から私の病院に来院した数々の整形外科症例を紹介し、その手術を見学させてもらった。当初はどのような手術を受けたかを飼い主に報告するために見せてもらっていたが、手術を見学しているうちに、自分自身で努力して、病院に来る動物は自分の手術で治したいと強く思うようになった。症例の手術をお願いした病院で、膝蓋骨内方脱臼、大腿骨頭骨頸切除術、片側椎弓切除術、TPLOなど数々の手術について教授を受け、当院の設備を徐々に整えていき、自分自身で対応できる整形外科疾患も増えてきた。

現在は大学の外科学研究室に大学院研究生として所属しており、月に2回程度ではあるが大学病院で軟部外科、腫瘍外科、インターベンショナル・ラジオロジーなど多岐にわたる高度な外科手術のノウハウを学んでいる。それに加え、年に1~2回は海外の外科実習セミナーに参加し、基本の外科手技の見直し、そして外科について最新の知識と技術を学んでいる。

以上のように、まだまだ十分とは言えないが、諸先生方から教えを受けながら、ひとつひとつの積み重ねで少

しずつ扱える手術が増え、これまでは他の動物病院を紹介する対応にならざるを得なかった症例も、当院で外科治療できることが多くなってきた。

近年、より専門性を持つ獣医師に診察、治療をしてもらいたいという飼い主の増加に伴い、高度獣医療を提供できる二次診療施設が増えている。今後、地域の診療施設は診断だけを行い、手術などはすべて専門医に任せるといった体系が増えていくことと思われる。しかし、一方で時間的制約、金銭的制約のために二次診療施設に行くことができない飼い主もいる。そのような飼い主のためにも、頻繁に遭遇する外科疾患や緊急を要する疾患に関しては地域の動物病院で対応する必要があると考える。

そこでより正確な診断や適切な手術を行い、地域動物医療へ貢献したいとの思いから当院は2年半前、病院を移転し、CT検査装置の導入に踏み切った。病院移転の後、ある飼い主から「近くに設備の整った動物病院があれば、安心して動物を飼い続けることができる」という嬉しい言葉をいただいた。

やはり地域の動物の病気は可能な限りその地域の動物病院で診断、治療し、飼い主や動物に移動、転院などの精神的なストレスも与えないということが動物医療の理想とする姿だと私は思っている。そのためには、自分の動物病院では対応できない疾患については近隣病院との連携や、その分野を得意とする獣医師を招聘し、手術に立ち会ってもらうことも必要であろう。

地域病院として正しい診断、よりよい治療を通じて飼い主に安心してもらい、動物に快適な生活を送ってもらえるよう、微力でも地域に貢献していくために、日々努力を続けていく必要性を感じている。

長谷往明

— 略 歴 —

2000年 日本大学卒業
同 年 千葉県千葉市の動物病院にて勤務
2003年 はせ動物病院開業
現在に至る
2009~2012年 日本大学動物病院 無給研修医
2012年~ 日本大学外科学研究室大学院研究生



[†] 連絡責任者：長谷往明 (はせ動物病院)